



あの山の彼方



4

小池トミジン

やがて、周囲の木々が高くなり木陰が多くなってきた。

疲れ始めた3人は無言で歩き続ける。

なんとなく、猫の話しのせいで気まずくなった事もあるが、

その気分を変えるような話題も見付からなかった。

木の根がところどころ地面から盛り上がり、

道を横断するように横たわっている。

三人とも時々つまづいて転びそうになる。

と、右手が少し開けて来た。

木々を透かして向こう側に広い場所が見える。

まず翔（かける）が気づき「あっ」と声をあげた。

陽介と草多も気づき、陽介が言った。

「あっち行ってみようよ」

脇道らしき草の踏み跡を見つけ、歩いて向かう。

突然、目の前が開け広い場所に出た。

「畑だ・・・」

陽介は呟いた。そこは、まだ何の芽も出ていない

土だけの畝（うね）が延々と続く畑だった。

陽介達の学校の校庭の10倍はありそうだ。

「こんな山の中に・・・」

と驚いていたが「あっ」と声をあげた。

「陽くん！あれ！ほら！」

翔の指差す方角を見ると、ちょうど子供ぐらの高さの棒が

地面に突き刺さっており、その先にロープがたれ下がっている。

そして、そのロープの先に何かがくくりつけられ、

風に揺れてブラブラ揺れている。

ブラブラ揺れる「それ」は、揺れるたびに

キラッキラッと光っていた。

「なんだあれ！？」

「行ってみよう！」

三人は畑の畝（うね）をぴよんぴよんと飛び越え、

「それ」に近づいていった。

時々、三人とも畝に足を取られ派手に転んだが、

学校で見た謎の光の正体がそこにあると思うと

三人とも笑い出し、焦って余計に転んだ。

広い畑の所々に7本、棒は立っており、

すべてに「それ」がぶら下がりキラッキラッと光っている。

「陽くん！これじゃね！？」

「これか？これかな！？」

はしゃぐ二人に少し遅れて草多も「あははは！」と

笑いながら付いてくる。

一番手近にあった棒に三人共たどり着いた。

はあはあ言いながら、ぶら下がっている「それ」を

よく見てみる。

「CD？」

陽介が手に取って見ると、それは間違いなく音楽のCDだった。

「なんでCDが？」

見渡すと、ぶら下がってキラキラしているのはすべてCDのようだ。

CDが太陽光線を反射してキラキラ光っている。

翔が何か思い出したように「あーっ」と大きな声をあげた。

「聞いた事ある！確か、鳥とか動物よけに鏡をぶら下げるんだよ！」

「はっ？」

「畑に植えた種をね、鳥とか動物がほじくり返して食べちゃうんだよ」

「それを防ぐために？」

「そうそう！カカシみたいなモンだって！

代わりに鏡使うんだって！

その鏡の代わりにCDだよきっと！」

「へえええ〜」

陽介と草多は声をそろえて感心した。

「でもCDってもったいなくない？」

「んんん〜」

CDの表面の文字をよく読んでみると、去年すごく流行した曲だ。

「わかった」

「これ、去年はすごく流行ったけど、今はもう古いじゃん」

「そうだね」

「♪〜♪〜」草多は音楽をハミングで口ずさんだ。

「今持っていると恥ずかしいCDなんだよ」

「なるほど。じゃあもったいなくなんかないか！」

「へえ〜」「へえ〜」と口々にCD手にして眺めていた三人だったが、

「学校から見えた光はこれだったのか？」

と陽介の疑問に、学校の方角を眺めたが、学校は見えない。

その畑と学校の間には大きなマンションが建っており、

陽介達が学校から光を見た位置ではないようだ。

どうやらまだここは矢倉山のような。学校から見えた光は、
ここから神振山を越えた遠見山から見えたはずだった。

「でも結局、遠見山まで行ってもこれと
同じじゃない？」

陽介が言うと、翔が

「僕もそうだと思うけど、学校から見えた光そのものを
確認したいな」

と言いだめたので、三人共その意見に賛成した。

三人は改めて遠見山へ向かおうという意思をお互い確認すると、

またもと来た方向へ向かって、畝を飛び越え始めた。

その時、

「こらああああ——！！！」

と、もの凄い大声が鳴り響き、三人は驚いて固まった。